

中国貨幣の歴史

29 遼・西夏の貨幣



とうわげんぼう
統和元宝



じゅうきつうほう
重熙通宝



けんとうげんぼう
乾統元宝

遼の貨幣

遼の銭貨は、年号銭と呼ばれる銅の一文銭で、ほぼすべての年号毎に铸造・発行された。銭銘を契丹文字で記した銭貨も知られるが、現存は極めて少なく、铸造時期等詳細は判明していない。



(西夏文字銘)
ふくせいげんぼう
福聖元宝



(漢文銘)
こうていげんぼう
光定元宝



(銅銭)



(鉄銭)

てんせいげんぼう
天盛元宝

西夏の貨幣

西夏が铸造・発行した銭貨は、主に銅の一文銭で、铸造量は少ないが鉄銭や西夏文字の銭銘の銭貨もある。いずれの銭貨も年号銭であるが、その種類は年号全体の4分の1程度にすぎない。

唐代半ばから宋代初めにかけて北方で台頭し、宋と対峙した「遼（契丹）」と「西夏」では、北宋銭と唐の開元通宝がその貨幣流通を支えていたが、独自の銭貨もわずかながら铸造・発行された。

唐代半ばから宋代初めにかけて北方で台頭し、「宋」(960～1279年)と対峙した「遼(契丹)」(916～1125年)と「西夏」(1038～1227年)では、主に北宋(960～1127年)から流入した銅銭(一文銭)がその貨幣流通を支えていたが、独自の銭貨も铸造・発行していた。

遼は、モンゴル系の契丹族が中国東北部で興した王朝で、燕雲十六州(現在の北京・大同周辺地域)からモンゴル高原にいたる広大な地域を領有した。建国後しばらくは北宋と対立したが、1004年の講和(澶淵の盟)後は、北宋より銀などを歳幣として毎年贈られ、平和な関係が続いた。銭貨については、天贊年間(922～926年)に独自の銭貨铸造を開始し、十数種類の年号銭を铸造・発行した。铸造量は国威が盛んであった七代興宗～九代天祚帝の時期(1031～1125年)に増加し、この時期の銭貨として「重熙通宝」など8種類の年号銭が知られている。遼は、漢文化への抵抗から、独自の契丹文字を建国当初に制定し、銭銘を契丹文字で記した銭貨も知られているが現存は少ない。

西夏は、唐末～五代十国時代に節度使として中国西北部で勢力を築いたチベット系タングート族が建てた王朝で、現在のオルドス高原(内モンゴル自治区の南部)から寧夏回族自治区、甘肅省などを領有した。西夏は、モンゴルに滅ぼされるまでの間、しばしば宋領内に侵入し、宋とは断続的な交戦状態にあった。銭貨については、二代毅宗(1049～1067年)の頃から独自の銭貨の铸造・発行を開始し、「大安通宝」、「光定元宝」など10種類程度の年号銭が知られている。铸造量は宋との交戦期には少なく、女真族の「金」(1115～1234年)が遼、北宋を滅ぼした12世紀初以降、銭貨の铸造は本格化し、「天盛元宝」ははじめ年号銭を継続して铸造・発行した。鉄銭や西夏文字の銭銘のある銅銭も知られているが、現存は少ない。なお、西夏は、中国と西方を結ぶ東西交易の要衝に位置していたため、高額・広域決済では銀が貨幣として一定の役割を担ったとされる。

大量出土銭(窖藏銭)に含まれる銭貨の種類・数量を分析した近年の研究によると、遼が支配した地域・年代からの出土銭は、北宋銭が70%弱、唐の開元通宝が30%で、遼の铸造銭貨は0.1%と極めて少ない。また、西夏は、北宋銭が85%を超え、開元通宝が10%強で、西夏の銭貨は1%程度にすぎない。こうした研究により、遼、西夏での銭貨流通は、独自に铸造した銭貨は僅少で、北宋銭と開元通宝に支えられていたことがわかってきた。

北宋は、11世紀後半の宰相・王安石の一時を除き、銅銭の輸出を禁止していた。このため、遼、西夏で流通していた北宋銭の多くは、北宋との密貿易により流入したとされる。主な流入ルートは北宋で専売下に置かれ高価であった塩の密貿易で、遼、西夏が国内で産出する安価な塩を北宋に密売し、その対価が北宋銭で支払われたと考えられている。なお、西夏の北宋銭の割合が遼に比べ高いのは、西夏は、建国年が遼より遅く、北宋滅亡後も存続し、流入期間が相対的に長かったことによる。

一方、開元通宝の割合が高いのは、遼、西夏ともにかつての唐の領地を版図に組み入れたことによる。遼は、漢民族の定住地帯で経済的に豊かであった燕雲十六州を、唐滅亡後の間もない段階で専売下に置いたため、同地で流通していた開元通宝が多く占める。西夏は、唐の領地とはいえ、開元通宝の流通が及びにくい唐の辺境地域であったことが、遼との違いとなっている。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

[参考文献]

三宅俊彦、『中国の埋められた銭貨』、同成社、2005年

宮澤知之、『中国銅銭の世界—銭貨から経済史へ—』、思文閣出版、2007年